

関係各位

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：JA全農ふくれん 営農総合課)

営農情報 8

麦の病害対策の徹底について

本年の麦の生育は、2月が高温多照で経過したため、生育が平年より早くなっており、全体的には茎数が多く確保されている状況です。

今後の気象が高温多湿条件になると、赤かび病の発生リスクが高まります。高品質な麦生産に向けて重要な管理作業となる赤かび病防除については、**播種時期の違いにより麦の生育進捗が異なっていることを踏まえながら、麦種や生育に応じた適期作業を実施**していただきますよう、よろしくお願いいたします。

また、6年産麦において子実の充実不足を引き起こした、コムギ黄斑病及びオオムギ網班病についても発生状況を確認し、感染が広がっている場合は防除の徹底に努めましょう。

1 麦種別の赤かび病防除適期

- ▶ 小麦、はだか麦：開花期（出穂後7～10日頃）～開花最盛期
- ▶ 二条大麦：穂揃期の約10日後（出穂後12～14日頃、葯殻が抽出する時期）

※「ちくしW2号」、「ちくし春香」、「ミナミノカオリ」、「はるか二条」、「イチバンボンシ」は、赤かび病に弱いため、**必ず2回防除を行う**。

※その他の品種についても、前年同様に、防除実施後に降雨や曇天が続く場合は、1回目の7～10日後に2回目の防除を行う。

《出穂期、穂揃期の見方》

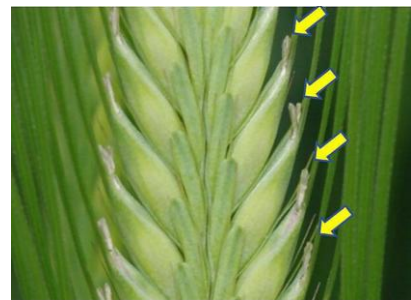
- 出穂：穂先が最上位葉の葉鞘から現れる現象
- 出穂期：ほ場内の40～50%が出穂した日
- 穂揃期：ほ場内の80～90%が出穂した日



小麦が出穂した状態



小麦が開花した状態



大麦の葯殻が抽出した状態

2 コムギ黄斑病、オオムギ網班病の防除について

これらの病気は、下位葉から上位葉へと進展し、特に止葉にまで被害が及ぶと登熟不良を引き起こし、屑麦が増える恐れがあります。高温多湿条件で感染拡大しやすく、前年作で被害が発生し、同一の麦種を作付けしているほ場では特に注意が必要です。

下図のような病斑の拡がりの確認される場合は、これらの病気に対して効果が高い薬剤（チルト乳剤 25 やミラビスフロアブル）を散布して、被害拡大を抑えましょう。

なお、出穂期前に上位葉まで病斑が進展している場合は、チルト乳剤 25 を出穂期までに散布し、その後に赤かび病防除を実施してください。

一方、病斑の進展が上位葉まで進んでいない場合は、赤かび病防除 1 回目にミラビスフロアブルを使用すると、本病に対しても同時防除が可能です。



コムギ黄斑病の病徴
(多発ほ場の例)



オオムギ網班病の病徴
(初期の病徴)

以上